

会議議事録

事業名	令和6年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業 (2)教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進
代表校	一般社団法人全国専門学校教育研究会

会議名	第3回産学連携推進員育成講座開発委員会
開催日時	令和6年10月17日(木) 15:00~17:00
場所	オンライン
出席者	事業責任者：岡村 慎一 計1名 委員：柳田 祐大、森川 和哉、土井 宏美、林 透、 藤井 貴志、三村 隆男、及川 源太、島田 勝彰 計8名 請負業者：飯塚 正成 計1名 <u>合計10名</u>
議題等	○進捗の共有(柳田) ・産学連携推進員育成講座の進捗状況 産学連携推進員育成講座の開発および検証は現在進行中で、2回の検証講座を経て最終版を作成中。今後の目標として、この講座を次年度の活動に向けてファシリテーター養成講座として発展させる予定であり、詳細は年明け以降に委員会で検討する。 ・これまでの取り組み 昨年度着手したサンプル教材が完成し、6月25日・26日に東京で講座を開催し、参加者からフィードバックを収集。9月の検証講座を経て改善点を整理し、改良版を12月に再度実施予定。 ・講座の目的 委員会側の目的：参加者のフィードバックを収集し、理解度を確認する。また、評価基準の改善やファシリテーター養成を目指す。 参加者側の目的：企業との協働の意義・価値を再確認し、ディプロマポリシーとの連携を見直すこと。 ・参加者および講座の内容 動物・ビジネス・キャリアサポート分野の先生8名が参加。講座はペーパーレスで、事前学習用の資料もドライブで共有し、参加者がパ

	ソコンを持参して進行した。各参加者には事前学習の動画を提供し、ワークシートを通じた予習を実施した上で講座に臨んだ。 ・ アンケート結果と改善点 満足度の平均は 4.87 と高評価だったが、時間配分やワークシートの見直しが今後の課題として指摘された。また、講座内容の理解度も比較的高かったが、改善の余地が見られるため、次回の講座での修正が求められている。 ・ 次回講座と今後の方針 12 月の第 2 回講座は、ファシリテーターを目指す管理職を対象に実施予定。参加人数は 10 名程度を見込んでいるが、特定分野への限定実施も検討している。委員会では改善案についても議論し、全国での展開を視野に入れた内容を調整中。 -----補足説明（講師：小池） ・ 講座の振り返りと成果 産学連携推進の研修目的は、職業実践専門課程の担当者に新しい視点と考え方を提供し、それをカリキュラムに実装する準備を行うこと。今回、受講者はディプロマポリシーの再確認とそれを基盤としたカリキュラム設計を行う必要性について理解を深め、企業連携の重要性についても再確認した。 研修では、参加者にキャリア教育の視点を再考するための事前教材、企業連携を意識したシナリオ、評価基準の作成、そして今後の課題解決のプランニングを盛り込んだ内容が提供された。 ・ 意識変容とネットワーキング効果 本研修を通じて受講者は、カリキュラムのアップデートに必要な視点や意識の変化を得た。また、異なる分野の担当者同士が対話を通じてネットワーキングを築くことで、新たな協働の副産物が生まれ、これが想定以上の成果をもたらした。 ・ 課題と改善点 時間の不足が主な課題とされ、特にカリキュラムデザインの具体化と企業連携の具体案策定が十分に行えなかった。多様な参加者のバックグラウンドや担当領域が異なるため、共通理解を深める時間が必要であり、これが個々のテーマに対する焦点化を難しくした。 ・ 今後の改善方針
--	---

	研修内容の取捨選択と焦点化を検討。時間を効果的に使うため、対象者を特化した集まりにすることで、より深い議論や具体的なカリキュラム設計が可能になると考えられる。また、ワークシートや評価ルーブリックなどのツールを再設計し、必要な事前情報やサンプルをあらかじめ提供することで、研修の効果を高める。 ・対象者と内容の調整 次回 12 月の研修では、参加者の専門分野や役割を考慮し、同じ領域での担当者を中心としたグループ構成を目指す。また、産学連携を実施する際に重要なカリキュラムや評価基準の作成に関する内容を中心に研修を行うことで、各校での実践的な活用を支援する。 ・事前研修とサポートツール 事前研修については、内容を簡略化し、必要な情報の提供とワークの準備に留める。これにより、リアル研修での時間を有効活用する。また、受講者の作成した成果物をサンプルとして次回に活用し、理解促進のためのサポートツールとしての充実を図る。 以上の内容に基づき、12 月の研修までに改善点を反映し、限られた時間内で効果的に学びを深めるよう再構築していく。 -----意見交換 ・研修のボリューム感と対象者への適合性について、現場の担当者にとって研修内容は有用だが、初参加者には負担が大きい。カリキュラムの全体像を簡潔に捉えるため、「カリキュラムマップ」や「カリキュラムツリー」を用いるとよりシンプルにできる可能性がある」と指摘。（林） ・ルーブリックの活用について、全体の達成度を俯瞰するのには良いが、詳細な評価には向かない。評価タイミングや手法を計画する「アセスメントプラン」を導入し、評価方法を整理することで、ルーブリックの過剰な依存を防ぐ方が良い。（林） ・今回のルーブリックは「意思・役割・能力」に基づくが、固有の評価方法にこだわらず、「アセスメントプラン」に基づき評価観点の整理を重視すべき。評価基準を具体的な人物像から導き出し、明確な基準設定と目標共有が重要と考え、評価基準の見直しが必要。（三村） ・2 日間の研修では現行内容を充実させる方向が良い。ただし、もし時間が厳しい場合には、1 日に焦点を絞ってポイントを明確にした研
--	---

	修の方が、参加者の満足度を高める。(岡村) ・ 産学連携推進者はカリキュラム全体を俯瞰する役割を担うべきであり、研修で領域ごとのプランニング共有を重視する。参加者同士で評価基準やアセスメントプランの共有が行われることで、各自の現場での応用力が向上するとし、ネットワーキング効果にも期待したい。(岡村) ・ 今回の研修は、内容が充実しているが、最終的にどこまでをゴールに設定するかが不明瞭。研修後に「結局何を持ち帰るのか」というポイントが見えづらいと感じており、効果的な持ち帰りができるようにスリム化が必要だ。また、特に6時間の研修でどのポイントを押さえないのかを明確にし、持ち帰る成果を明確にすべき。(三村) ・ 6時間の研修に絞るために事前学習で学ぶべき内容を事前準備させ、研修の際には「本当に押さえてほしい要点」に集中すべき。また、現場に戻って実践できるような焦点化が大切だ。今後の再設計では、1日で完結する形式への見直しを行うことが効果的だ。(三村) ・ この研修が単に受講者が新たな知識を得るだけのものに留まらず、現場での実践に活かせるプロセスが必要だと述べている。また、研修で得た知識を現場で実行するための「ファシリテーター養成」が必要であるし、次年度以降のファシリテーター養成プログラムにおいて、研修内容がスリム化され、持ち帰り後に学校内で活用できるような設計をするべき。(岡村) ・ 研修内容を事前学習で補完し、特に「現場で使用するための具体的な内容」に焦点を当てることで、6時間という限られた時間内に必要な情報と指導を充実させられると提案している。また、ファシリテーター養成プログラムでは、今回の研修のスリム化によって「実践力を育む」ことが重要。(及川) ・ 産学連携の推進役が管理職に限られないケースも多いため、今回の研修対象を管理職に限定せず、現場の先生も参加できる柔軟な対象設定をするべき。具体的には、各学校の状況によって「産学連携を推進する役割」が必ずしも管理職に固定されているわけではないため、現場教員が中心となって推進している場合もあることを踏まえるべき。(島田)
--	---

	・ 今回の研修における「異なる分野や立場を持つメンバー間の化学反応」によって新たな学びが生まれる可能性が高いが、研修内容の焦点化が課題。特に、参加者が多様な分野や経験を持つことが交流の意義を深める一方、研修の内容がより一層具体的なテーマやゴールに集中していると成果が上がると感じている。（藤井） ・ 段階的なカリキュラムを提案し、まず基礎編として全体像を把握し、その後応用編で具体的な取り組みや評価方法の習得に進む形がよい。基礎的なマインドセットを養成した上で、評価基準やルーブリックの活用方法、カリキュラム設計を進める内容により焦点を当てることで、研修内容の充実度が高まる。（土井） ・ 今回の研修が基礎知識を得る基礎編と、カリキュラム評価や産学連携の具体策を練る応用編に分ける。これは、短期間である程度の基礎知識を得ることができ、次年度以降のより深い学習に備えることができるため、効果的だ。また、次年度以降のプログラム設計では、現場での活用を考慮し、特に評価基準や評価計画といった具体的なプロセスに焦点を当てる。（三村） ・ 研修内容をスリム化しつつも、学びの効果を十分に得られるように内容を厳選することが必要。基礎編では参加者が「評価基準」や「ディプロマポリシーに基づいたカリキュラムの見直し」を理解し、応用編では「具体的な産学連携のカリキュラム運用」といった実践的な内容を扱うことで、現場への即時応用が可能な研修設計ができる。（森川） ・ 参加者が研修の中で自己の職務を振り返り、自校での課題意識を深めることが学びにとって有効である。研修内容の厚みが重要である。また、研修を「6 時間で完結するのではなく、じっくりと自己を振り返る時間が設けられる」形式にすることで、現場での応用力が高まる。（岡村） ・ 今後の研修において、ファシリテーターが現場で実際に教育効果を発揮できるような「役割を引き受ける力」を養成することが必要。また、カリキュラムデザインや評価基準について研修を受け持つファシリテーターが現場で対応できることが求められるため、現場経験者も含めた体系的な育成が有効である。（及川）
--	---

(様式)

	○第2回検証講座 ・令和6年12月9日(月) 13:00～17:00 10日(火) 9:00～13:00 場所は、委員の学校にて実施。 候補は、京都YIC学院 ○第4回委員会 ・令和7年1月14日(火) 15～17時 オンライン開催
配布資料	・次第

以上